

大分県の「真名野長者伝説・物語」と韓国

金 賛 會

要旨

炭焼長者（真名野長者）説話は日本全国に広く伝承されているが、その伝承の故郷は大分県三重町と言われてきた。しかし、なぜ炭焼長者の故郷が大分県三重町と言えるのが解明されていない。また、韓国の炭焼長者説話の中で大分県の「真名野長者伝説・物語」に一番近似し、歴史的にも古いのは、「武王物語」である。従来の研究では両者を具体的に比較し、その伝承関係を明らかにした論考はなかった。私は真名野長者という人は実在した可能性がきわめて高いと考えている。真名野長者の「真名」は当て字で、『日本書紀』の武烈天皇五年条に見える、百済国の武寧王（斯麻王）と深く関わる「麻那王」と同一人物・氏族と考えている。「真名」（麻那）という氏族は、おそらく王族で製鉄集団であると考えられるが、この真名王族が何らかの理由（おそらく政権争い）で大分県三重町に移動し、それによって「武王物語」にきわめて近似した、真名王族の神話とも言える「真名野長者伝説・物語」の原型というものがいっしょに運ばれたのではないかと推測している。また、三重町蓮城寺（内山観音）の開基とされる百済国の蓮城法師などもこの真名王族と深く関わる宗教集団であったろう。

キーワード：真名野長者伝説・物語、武王物語、善童、麻那（真名）、蓮城寺（内山観音）、久知良、柴守、武寧王（斯麻王）、東城王（末多王）

1. はじめに

大分県三重町が炭焼長者の故郷、と主張したのは柳田国男であった¹⁾。それ以来、炭焼長者に関する論文はたくさん発表されているが、今のところ三重町の「真名野長者物語」を中心に論じた論考はきわめて少ない。管見の限りでは、臼杵市教育委員会が発行している『臼杵石仏地域の民俗』のなかに、橋本操六氏「炭焼小五郎は実在しなかった」、大波多海氏「炭焼小五郎は実在している」の論考²⁾があり、また室町時代の幸若舞の「烏帽子折」以下の「用命天皇物語」と「真名野長者物語」の諸本を詳細に分析し、「炭焼小五郎・真名野長者物語は、決して九州の山里の特定の実在した人物ではない」とする松岡実氏の論考³⁾がある。また芦刈政治氏は、近世に成立した「真名野長者物語」の諸本を紹介され、近世本以前の「烏帽子折」や『豊府新聞』収載の長者譚と詳しく比較しておられる。そして、「真名野長者伝説」と違って、「真名野長者物語」は、蓮城寺の寺僧祐旻が一七〇〇年代の前半に創作したものであること、さらにその長者物語には、作者の人生観・社会観を中心に、中世からの信仰や玉世姫出現までの長者譚、そして西日本各地、特に瀬戸内海地域の古い伝説などを組み込んで創作されたものであると論じておられる⁴⁾。また、芦刈政治監修・三重町古文書を読む会解説による『真名野長者伝記纂集 真名野長者一代観音記 内山山王縁起』⁵⁾にその翻刻や現代語訳がなされている。さらに白方勝氏は、真名野長者説話の諸伝承を紹介し、その物語の流れや様相について詳しく述べておられる⁶⁾。そして最近では、三重町の郷土史家・佐藤芳延氏による『伝説の里 内山 奥豊後山里の原風景』⁷⁾が公刊されており、「真名野長者」の伝承地を詳細に踏査し、記録に留めたという点で意義深い。

以上の諸先学の研究をふまえて、本稿では「真名野長者物語」を整理し、これとほぼ同じ内容を持つ韓国の炭焼長者説話を紹介する。そして、その中で、どの説話が三重町の「真名野長者物語」に一番近いのか、その説話のモチ - フを通して論じる。また、「真名野長者物語」に非常に近い内容を持ち、その文化的背景においても類似性が見られる韓国

の「武王(薯童)物語」を紹介し、その「武王物語」系の説話がどのような経路をへて、またどのような人たちによって大分県三重町に運ばれたのかについて考えてみたい。

2. 「真名野長者物語」⁸⁾

第一部 炭焼小五郎物語(炭焼長者・初婚型)

- (1) 豊後国(三重町)の玉田の里に子供が生まれ、幼き名を藤治と言ひ、三歳に父、七歳に母と死に別れ、孤児となる。炭焼き又五郎に育てられ、その跡を継いで名を改め炭焼小五郎と呼ばれるようになる。〔炭焼小五郎誕生〕
- (2) その頃、奈良の都に大臣の娘で玉津姫というとても美しい姫様が住んでいたが、顔に黒い痣が出来て結婚する相手が無く嘆き悲しんでいた。三輪明神に祈ると、「汝が夫有りと雖も、遠く山海を隔つ。是より西国、豊後三江の山里に炭焼きの小五郎という者なり。吾が名も知らざる山賤なり。然れども此の者と嫁せば富貴自在にて、長者となるべし」というお告げがある。〔神のお告げ〕
- (3) 玉津姫は炭焼小五郎を訪ね、都を出て豊後に下り、神の導きによって三重町に着く。〔姫君の下向〕
- (4) 玉津姫は炭焼小五郎と出会い、神のお告げで都からはるばる下った話をすると、炭焼小五郎は困惑する。そこで玉津姫が持参した黄金を取り出して炭焼小五郎に与えて買い物に行かすと彼は黄金の値打ちが分からなく、池で遊んでいる鴛鴦に投げつけて手ぶらで帰ってきた。玉津姫が「あれは黄金という大事な宝物です」というと炭焼小五郎は笑いながら、「こんなものは池の周りや炭焼き窯にいくらでもある」という。二人が池に行ってみると、池にはたくさんの黄金があった。〔結婚・黄金発見〕
- (5) その時、池の中から金色の亀が浮かび上がってきた。亀は、「あなた方夫婦にこの宝を差し上げよう」と言って、金色の鴛鴦に姿を変え、西をさして飛び去った。神のお告げの通りその池で顔を洗うと姫は黒痣がとれ美人となり、小五郎は美男子と生れ変わった。〔亀の出現〕
- (6) 小五郎と玉津姫は黄金を集め、あつという間に長者となる。世間の人は小五郎を真名野長者と言うようになる。〔長者〕
- (7) 長者夫婦は山王神のお告げ通りきれいな女の子をもうけ、般若姫と名づける。その翌年、百済の船頭・龍伯が一寸八分の黄金の千手観音を持ってきて般若姫の守り本尊とし差し上げる。長者夫婦は唐国の天台山に黄金三万両を送った。〔黄金送り〕
- (8) 天台山では百済の僧・蓮城法師に薬師観音の像を持たせて日本に送り、長者は薬師観音を迎え喜んで朝夕祈念する。(伝説では蓮城寺<内山観音>を建立する)〔蓮城法師の来朝〕

第二部 欽明天皇の恋物語(絵姿女房・難題解決型)

- (9) 般若姫の美しさは長安の都にまで知られ、帝は般若姫の絵姿を描いて来るように命じ、絵描きが日本に来て絵図に写して帰るほどであった。〔絵姿女房〕
- (10) 般若姫の美しさは奈良の都にまで広がり、唐の絵描きが描き残した絵姿(玉絵箱)は天皇(欽明天皇)の手に入る。〔絵姿の飛翔〕
- (11) 般若姫の絵姿に惚れた天皇は、勅使を派遣して、「白胡麻・黒胡麻・菜種の実・芥子の実をそれぞれ千石納めること、虎の皮・ラッコの皮・豹の皮をそれぞれ千枚納めること、白布千端・黒布千端・錦千巻・綾千巻・珊瑚五百粒・瑠璃珠五百粒に千粒の珠を添えて納めること」の難題を出して、「ひとつでも解決しなければ姫を連れて来い」と言う。〔天皇の難題〕
- (12) 長者は巨大な財力でその難題のすべてを解決する。〔難題解決〕
- (13) 天皇は、「三度の難題を出したことは自分の過ちだった」と言って、勅命に違反した小五郎の罪を許してやり、「真名野長者」という称号を与える。〔栄華〕

第三部 用明天皇物語(草刈り山路説話)

- (14) 橘豊日皇子(後、用明天皇)は、般若姫の絵姿を見て恋しくなり、姿を変え三重町に下る。山路と名付けられ、

長者家の牛飼いとして入って働いてもなかなか姫の姿を見ることができなく、夜もすがら牛に乗って笛ばかり吹き神に祈った。そのとき、般若姫は急病となり、神の神託によって山路が見事に三度の的を射ると姫の病気が治り、やがて山路は般若姫と契りを結ぶ。〔用明天皇物語〕

第四部 般若時建立（草刈氏由来）と蓮城寺建立

(15) 皇子は都に帰り用明天皇となり、般若姫は女の子を出産、玉絵姫と名付ける。般若姫は天皇を慕って都に向かうが、その途中、海難に遭い十九歳という若さでなくなる。〔玉絵姫の誕生と般若姫の死〕

(16) 伊弉利大臣の三男・金政公は玉絵姫と結婚し、金政公は橘豊日皇子が長者の家で草刈りをしたことに因んで氏を草刈りと号し、名を左衛門、姓を橘、諱を氏次と称することにした。〔玉絵姫・金政公の結婚と草刈氏由来〕

(17) 長者は般若姫の供養のため、豊後国に蓮城寺と満月寺、周防国に般若寺、伊予国に太山寺を建立する。

〔般若寺の建立〕

(18) これより先百済の僧・蓮城が来朝、長者の家を改築して内山蓮城寺を建立する。長者はよく長寿を保ち、この世を去る。〔蓮城寺建立〕

このように、「真名野長者物語」は、大きく、前半の炭焼小五郎の誕生から黄金を発見して真名野長者になるまでの「炭焼小五郎物語」と、昔話の絵姿女房（難題解決）の話型に属する「欽明天皇の恋物語」と、室町時代の幸若舞曲「烏帽子折」や御伽草子の「京太郎物語」などに見えるいわゆる用命天皇が草刈りの姿に身を変え、きれいな姫君を訪ねるという「用命天皇物語（草刈り山路説話）」などで構成されている。

「炭焼長者」とは、貧しい炭焼き（芋掘り）が福運を持った女性との結婚で黄金を発見して長者になる話である。大きく女性が初婚なのか再婚なのかによって、大きく「初婚型」と「再婚型」と分かれているが、「再婚型」とは一旦は結婚したものの、別れて妻が再婚して生まれつきの強運で幸せになるという話である。真名野長者物語は玉津姫が炭焼小五郎と初婚なので「初婚型」に属する。

また「絵姿女房」とは、ある男が美しい女性と結婚し、妻の絵姿が風に飛ばされ殿様の手に入り、妻を奪われるが、妻の機知によって再会、男が殿様となって幸せに暮らすという話。これには大きく「桃物売型」と「難題解決型」（難題女房型）がある。「桃売型」とは、妻を奪われた男が女のもとに桃売りとして現れるというところから付けられた名称である。これに対して「難題解決型」は、ある男が美しい女性と結婚し、妻の絵姿が風に飛ばされ殿様の手に入る。ここまでは「桃売型」と同じであるが、さらに王様は男に難題を与えて、もしその難題を解決できなかったら妻をよこせと要求されるが、妻は非常に賢くて夫に課せられた難題をすべて解決してやるという内容である。この「桃売型」と「難題解決型」の中で、「真名野長者物語」に含まれている内容は欽明天皇が真名野長者に難題をかけて娘をよこせということなので、「難題解決型」に属する。

このように見てみると三重町の「真名野長者物語」は、「炭焼長者」だけではなく、「絵姿女房」、そして「草刈り山路説話」などいろいろな説話がミックスされて構成されていることがわかる。私はもともと「真名野長者物語」は第一部の「炭焼小五郎物語」が中心で、後で「絵姿女房」や「草刈り山路説話」などが習合されたと考えている。

そこで、昔話の絵姿女房（難題解決）の話型に属する「欽明天皇の恋物語」と、室町時代の幸若舞曲「烏帽子折」や御伽草子の「京太郎物語」などに見えるいわゆる用命天皇が草刈りの姿に身を変え、きれいな姫君を訪ねるという「用命天皇物語（草刈り山路説話）」は、本稿の考察の対象から省き、「炭焼小五郎物語」を中心に韓国の「炭焼長者」と比較を試みたい。



百済国の蓮城法師の開基とされる蓮城寺(内山観音、大分県大野郡三重町大字内山所在)



真名野長者(炭焼小五郎)夫婦の墓(大分県大野郡三重町大字内山所在)

3. 韓国の「炭焼長者」

1) 再婚型

「炭焼長者」の再婚型は、占い型の「再婚A型」、産神問答型の「再婚B型」、夫婦離別型の「再婚C型」に分類できるが、ここでは占い型の「再婚A型」と産神問答型の「再婚B型」を紹介する。

占い型(再婚A型)

- (1) 昔、ある大臣の家に息子がいた。大臣は占いができる者で、自分の息子の運勢を占ってみると、一生物乞いをし暮らすという結果が出る。 [大臣の占い]
- (2) 大臣は嫁を探して全国を歩き回り、家に福運をもたらしてくれる身分の低い白丁の娘に逢い、むりやりに息子と

結婚させたところ、家は豊かになる。

〔福分の娘〕

(3) 大臣が死ぬと夫は妻が身分の低い白丁の娘であることを嫌って家から追い出す。

〔夫婦の離別〕

(4) 妻は貧しい炭焼と再婚し、炭を焼く場所で黄金を発見する。

〔再婚・黄金発見〕

(5) 夫は黄金の値打ちがわからないが、妻に教えられ、黄金を売って長者となる。

〔長者〕

(6) 先夫は妻を追い出してからすぐ零落して乞食となる。

〔先夫の非運〕

(7) 先妻は先夫を思って乞食宴会を開く（別本、先妻は先夫の家に物乞いに行く）。

〔先夫の訪問〕

(8) 先妻は先夫を迎えて食事をもてなすが、先夫は気づかない。先妻が昔の女であると告げると、先夫は先妻であることを知る。

〔夫妻の確認〕

(9) 先夫は前非を悔いる。先妻は先夫の罪を許し、復縁して黄金を持ち帰って幸せに暮らす。

〔福分認定〕

このように、上の説話は最初が「大臣の占い」から始まることから、私は「占い型」と名付けているが、この占いの部分は、「真名野長者物語」において、三輪明神が玉津姫に「はるばると三重町に炭焼長者がいる。その者と結婚すれば豊かに暮らせる」と告げている部分とも通じる叙述である。が、姫君が男に離縁され炭焼と再婚するという点で「真名野長者物語」と大きく違っている。「真名野長者物語」ではなぜ、玉津姫が三輪明神のお告げではるばると離れた三重町に住む炭焼小五郎を訪ねてくるのが問題であるが、そこにはこの物語と深く関わった三輪（大神）氏の存在が投影されていると言えよう。

産神問答型（再婚B型）

(1) ある両班（ヤンバン、支配階級）が櫛の下で寝ていた。そこに産神が現れ、「今夜両班の家と身分の低い白丁の家にそれぞれ男の子と女の子が生まれた。女の子が生まれた家は私を丁寧を迎えてくれたので一生食べていける福運を与え、両班の家は私を虐待したので一日分の食事だけを与えて帰ってきた」と語る。

〔産神問答〕

(2) びっくりして家に帰ってきた両班は、身分の低い白丁の家を訪ね、「この二人は同年同月同日に生まれたので、大きくなったら結婚させよう」という。まもなく二人は成人し、約束通り結婚させたところ両班の家は豊かになる。

〔福分の娘〕

(3) 親が死ぬと夫は妻が身分の低い白丁の娘であることを嫌って家から追い出す。

〔夫婦の離別〕

(4) 妻は貧しい炭焼と再婚し、炭を焼く場所で黄金を発見する。

〔再婚・黄金発見〕

(5) 夫は黄金の値打ちがわからないが、妻に教えられ、黄金を売って長者となる。

〔長者〕

(6) 先夫は妻を追い出してからすぐ零落して乞食となる。

〔先夫の非運〕

(7) 先妻は先夫を思って乞食宴会を開く（別本、先妻は先夫の家に物乞いに行く）。

〔先夫の訪問〕

(8) 先妻は先夫を迎えて食事をもてなすが、先夫は気づかない。先妻が昔の女であると告げると、先夫は先妻であることを知る。

〔夫妻の確認〕

(9) 先夫は前非を悔いる。先妻は先夫の罪を許し、復縁して黄金を持ち帰って幸せに暮らす。

〔福分認定〕

この説話は冒頭部分が産神問答から始まっているので再婚型の中で「産神問答型」と名付けているが、先ほどの再婚型の「占い型」と冒頭部分が違うだけでその後の叙述はほぼ「占い型」と同じ叙述となっている。この「産神問答型」も三重町の「真名野長者物語」とかなり違う展開を見せていることがわかる。

2) 初婚型

「炭焼長者」の初婚型は、親の非運を語る「初婚A型」と親の非運を語らない「初婚B型」に分類できる。

親の非運を語るもの（初婚A型）

(1) 昔、ある金持ちの家に三人の娘が住んでいた。ある日父は三人の娘を呼んで、「誰のお陰で幸せに暮らしているのか」と聞く。長女と次女は「父のお陰」と答えるが、末娘は、「私の福分のお陰」と答える。

〔福分の娘〕

(2) そのため、末娘は父の怒りをかって家から追い出される。

〔末娘の追放〕

- (3) 末娘は山中で貧しく暮らしている炭焼と出会って結婚し、炭を焼く場所で黄金を発見する。 [結婚・黄金発見]
- (4) 夫は黄金の値打ちがわからないが、妻に教えられ黄金を売って長者となる。 [長者]
- (5) 末娘を追い出した実家はすぐ没落し、父は乞食となる。 [父の非運]
- (6) 父は豊かに暮らしている末娘の家に物乞いに行く。 [父の訪問]
- (7) 末娘は、訪ねてきた乞食が父であることを知って、家に迎え、酒飯をもてなす。 [親子の確認]
- (8) 末娘は、迎え入れた父と幸せに暮らす。(父は「私の福分のお陰」と言った娘が正しかったことを認める) [福分認定]

この親の非運を語る「初婚A型」は、親が自分の娘に「誰のお陰で幸せに暮らしているのか」と聞いており、長女と次女は「父のお陰」と答えるが、末娘だけが「私の福分のお陰」と答えて家から追い出される叙述となっており面白い。これを三重町の「真名野長者物語」に比べてみると、家を出た娘が炭焼長者と結婚して長者となるという点では「真名野長者物語」と同じであるが、娘を追い出した親が不幸になり乞食となって娘を訪ねていくという点で「真名野長者物語」と大きな違いが見られる。

また、この親の非運を語る「初婚A型」は濟州島のシャーマンのシムバンの神話としても伝承されている。

- (1) 昔、上の村に住む男の乞食と下の村に住む女の乞食が結婚して三人の娘を生む。末娘であるカムンジャン姫が生まれると家は豊かになる。ある日父は三人の娘を呼んで、「誰のお陰で食べて暮らしているのか」と聞く。長女と次女は「父のお陰」と答えるが、末娘のカムンジャン姫は、「私の臍の下の縦線のお陰」と答える。 [福分の娘]
- (2) 怒った父は、カムンジャン姫を黒牛に乗せ、家から追い出す。 [末娘の追放]
- (3) カムンジャン姫を追い出した父は門の柱にぶつかって盲目となり、元の乞食となる。 [父の非運]
- (4) カムンジャン姫は貧しく暮らしている芋掘りと結婚し、芋を掘る場所で黄金を発見する。 [黄金発見]
- (5) 夫は黄金の値打ちがわからないが、妻に教えられ、黄金を売って長者となる。 [長者]
- (6) カムンジャン姫は親を思って夫と相談して乞食宴会を開く。親は姫のところを訪ねてくる。 [父の訪問]
- (7) カムンジャン姫は訪ねて来た親を迎えて酒飯をもてなし、親は末娘であることを知り驚いて目がぱっと開く。 [親子確認]
- (8) カムンジャン姫は親とともに幸せに暮らす。(カムンジャン姫は親に裕福な暮らしは自分の福分によるものであることを確認させる)。 [福分認定]

この神話は、家を追われた娘が炭焼長者ではなく、芋掘りと結婚して長者となるもので、炭焼が芋掘りとなっている違い以外は先ほどの物語と同じ展開を見せている。問題はなぜこの炭焼長者譚をシャーマンである巫女が語るのかであるが、巫女が祭りをを行う場合は刀、押し切り、鈴、鐘などの道具が絶対的に必要となる。これを作るのが鍛冶屋である。このように巫女と鍛冶屋は深く関わる仕事であり、巫女と鍛冶屋が夫婦となって巫覡活動をする場合もある。

親の非運を語らないもの(初婚B型)

- (1) 昔、ある貧しい家に父と三人の娘が住んでいた。ある日、父は三人の娘を呼んで、「どの家に嫁ぎたいのか」と聞く。長女と次女は、「金持ちの家」と答えるが、末娘は、「貧しい家」と答える。(別本、父は「誰が貧しい炭焼に嫁ぎたいのか」と聞く。長女と次女は「炭焼はいやだ」と答えるが、末娘は自分が嫁ぎたいと答える)。 [福分の娘]
- (2) 怒った父はカムンジャン姫を家から追い出す。(別本、怒った父は末娘を貧しい炭焼と結婚させる) [末娘の追放]
- (3) 末娘は山中で貧しく暮らしている炭焼と出会って結婚し、炭焼窯で黄金を発見する。 [結婚・黄金発見]
- (4) 夫は黄金の値打ちがわからないが、妻に教えられ黄金を売って長者となる。 [長者]

(5) 長者となった末娘は夫とともに幸せに暮らす。

〔栄華〕

この親の非運を語らない「初婚B型」を三重町の「真名野長者物語」に比べてみると、「真名野長者物語」では、神のお告げによって姫君が炭焼を訪ねていくのに対して、この韓国の「初婚B型」は親の期待に沿わない姫君が追い出される点と、炭焼と結婚して長者となった娘の身分が貧しい家の身分であるという点で「真名野長者物語」と違っているが、それ以外はほぼ「真名野長者物語」と同じ展開を見せている。すなわち、この親の非運を語らない「初婚B型」の炭焼長者は三重町の「真名野長者物語」と同じタイプの説話である。この親の非運を語らない「初婚型」の炭焼長者は、文献説話として、百済国第三十代王である武王（六〇〇～六四〇）の由来を語る「武王物語」として伝承されていることが注目される。この「武王物語」が韓国の炭焼長者の説話の中で一番、三重町の「真名野長者物語」と近い内容を持っていると言える。この物語の主人公である武王は、朝鮮半島の古代国の一つである百済国の二十九代の法王の後を継いで王様となった人物である。

武王物語（『三国遺事』 一二八四～一二八九 卷二所収）

- (1) 百済国の第三十代 武王の名は璋である。彼の母は寡婦で都の南にある池のほとりに家を建てて住んでいるうち、その池の龍と交わって子供が生まれ、幼き名を薯童と言ひ、いつも薯を掘って売り、それで暮らしをたてていたのでみんなからそう呼ばれるようになった。〔薯掘の薯童誕生〕
- (2) その頃、新羅国の都に真平王の第三の王女で善花姫というとても美しい姫様が住んでいた。薯童はその噂を聞いて、髪を剃り坊主の姿で都に上り、「善花姫様は、こっそりと嫁入りなされて、夜には薯童様を抱きしめて去る」という童謡を作って子供達に歌わせた。〔童謡のお告げ〕
- (3) その童謡が王様の耳に入り、善花姫は遠く離れた島に流されるようになり、都を離れた。〔姫君の下向〕
- (4) 善花姫は旅の途中でやってきた薯童と出会い、あの童謡がことの起こる前触れであったのだと信じ、一緒に百済国に辿り着き暮らすことになった。そこで善花姫が持参した黄金を取り出して薯童に与えると、薯童は笑いながら、「これは何ですか」と言った。善花姫は、「これは黄金です。これだけあれば百年の富でさえ大丈夫です」と言うと、薯童は、「こんなものなら私が小さい時から薯を掘っていた所にいくらでもある」という。二人がそこへ行ってみるとたくさんの黄金があった。〔結婚・黄金発見〕
- (5) 二人は黄金を山のように積み集め、善花姫の父である新羅の真平王（第二十六代、五七九～六三二）に送ることとし、龍華山にある獅子寺の知命法師にお願いした。すると法師はたくさんの黄金を神秘的な力で一夜のうちに新羅の宮殿に送った。〔黄金送り〕
- (6) 真平王はこのような神秘に満ちた出来事を不思議に思い、いつも安否を問い、これによって薯童は人望を得て王様（百済）となる。〔王位継承〕
- (7) ある日、王様（薯童）が夫人（善花姫）を連れて獅子寺に参る途中、龍華山の下の大い池から弥勒仏三尊が浮かび上がってきた。〔弥勒仏三尊の出現〕
- (8) 王様夫妻はそこに寺を建立することとし、知命法師に相談すると、法師は神秘的な力で一夜のうちに池を埋め平地にしてしまった。そこに弥勒三尊と、会殿、塔、廡廊を各々三力所に建て寺名を弥勒寺と名付けた。新羅国の真平王がいろいろな工人を送ってきて助けてくれた。〔弥勒寺建立〕

この「武王物語」は、今までの昔話と違って、(1)のところ、幼き時代薯掘だった武王の誕生を最初に述べることから始まる。この点は「真名野長者物語」でも同じである。そして、その薯童のところ、身分の尊い新羅の王女の娘・善花姫が訪ねて来て一緒に暮らす。王の姫様という身分が高い姫が炭焼（薯童）を訪ねていくという点で「真名野長者物語」と一致している。また、善花姫が持参していた黄金を取り出して薯童にあげると、彼はお金の値打ちが分からない。「こんなものは薯を掘っているところにたくさんある」と言う。二人はその黄金を発見して長者になるのではなく、その黄金を善花姫のお父さんに送って王様になるのである。黄金を送るという趣向は「真名野長者物語」でも見られる。普通の昔話では、薯掘、または炭焼が長者になるところで話が終わっているが、ここではさらに池の中から弥勒

仏三体が浮かび上がってくる。この池の中から弥勒仏三体が浮かび上がってくるという趣向は、「真名野長者物語」では亀が浮かび上がってくる叙述と一致している。そして王になった善童はその池を埋めてそこに寺を建てるが、それが弥勒寺の開基である。つまりこの物語は寺院縁起説話となっているが、「真名野長者物語」においても「蓮城寺」という寺院縁起説話となっている。



百済国の第30代の武王が建立したとされる弥勒寺址(韓国全羅北道益山市金馬面所在)



武王(善童)夫婦の墓とされる益山双陵(韓国全羅北道益山市石旺洞所在)

4. 大分県の「真名野長者物語」と韓国の「武王物語」

両者の関わりをもう少し明確にするため、両者の内容を対照して示すと次のようになる。

	真名野長者物語	武王物語
炭焼誕生	豊後国（三重町）の玉田の里に子供が生まれ、幼き名を藤治といい、3歳に父、7歳に母と死に別れ孤児となる。炭焼又五郎に育てられ、その後を継いで名を改め炭焼小五郎と呼ばれるようになった。	百済国の第30代の王様は武王という者である。彼の母は寡婦で都の南池の近辺に家を建てて住んでいた。そんな中で池の龍と交わって子供が生まれた。いつも薯を掘って売り、暮らしを立てていたので薯童と呼ばれるようになった。
神のお告げ	その頃、奈良の都に大臣の娘で玉津姫というとても美しいお姫様が住んでいた。顔に黒い痣ができて結婚する相手がなく嘆き悲しんでいた。三輪明神に祈ると、「汝が夫は大分県三重町に住む炭焼小五郎という者だ」というお告げがあった。	その頃、新羅国の都に真平王の第3の王女で善花姫というとても美しいお姫様が住んでいた。薯童はその噂を聞いて、髪を剃り坊主の姿で都に上り、「善花姫様はこっそりと嫁入りなされて、夜には薯童様と交わって去る」という童謡を作って子供たちに歌わせた。
姫君下向	玉津姫は炭焼小五郎を訪ね、都を出て豊後に下り、神の導きによって大分県三重町に着く。	その童謡が王様の耳に入り、善花姫は遠く離れた所に流されることになり、都を発った。
結婚・黄金発見	玉津姫は炭焼小五郎と出会い、神のお告げで都からはるばる下った話しをすると、炭焼小五郎は困惑する。そこで玉津姫が持参した黄金を取り出して炭焼小五郎に与えて買い物に行かせると、彼は黄金の値打ちが分からず、池で遊んでいる鴛鴦に投げつけて手ぶらで帰ってきた。玉津姫が「あれは黄金という大事な宝物です」というと炭焼小五郎は笑いながら、「こんなものなら池の周りや炭焼き窯にいくらでもある」と言った。二人が池に行ってみると、池にはたくさんの黄金があった。	善花姫は旅の途中でやってきた薯童と出会い、あの童謡が神のお告げであったのだと信じ、一緒に百済国に辿り着き暮らすことになった。そこで善花姫が持参した黄金を取り出して薯童に与えると、彼は黄金の値打ちが分からず、「これは何ですか」といった。善花姫は、「これは黄金です。これだけあれば百年の富でさえ大丈夫です」というと、薯童は笑いながら「こんなものなら小さい時から薯を掘っていた所にいくらでもある」と言った。二人がそこへ行ってみると、たくさんの黄金があった。
黄金送り	（後出）	二人は黄金を山のように積み集め、善花姫の父である新羅の真平王に送ることとし、龍華山にすむ知命法師というお坊さんをお願いした。すると法師はたくさんの黄金を神秘的な力で、一夜の内に新羅国の宮殿に送った。

	真名野長者物語	武王物語
亀の出現	その時、水底から金色の亀(仏様)が浮かび上がってきた。神のお告げの通りその池で顔を洗うと姫は黒痣が取れ美人となり小五郎は美男子と生まれ変わった。	(後出)
長者	小五郎と玉津姫は黄金を集め、あつという間に長者となる。	真平王はこのような神秘に満ちた出来事を不思議に思いつつも安否を問い、これによって蕃童は人望を得て王様となる。
黄金送り	長者となった小五郎は益々信心深くなり、唐の天台山に黄金3万両を送った。	(前出)
弥勒の仏出現	(前出)	ある日、王様(蕃童)は後の善花姫を連れて獅子寺に行く途中、龍華山の下の大い池から弥勒仏三尊が浮かび上がってきた。
寺院建立	天台山では返礼として百済の僧・蓮城法師に薬師観音の像を持たせて日本に送り、長者は蓮城法師を迎え、蓮城寺(内山観音)を建立する。	王様夫妻はそこに寺を建立することとし、知命法師に相談すると、法師は神秘な力で一夜の内に池を埋め、平地にしてしまった。そこに弥勒寺を建立する。

まず、(一)の〔炭焼誕生〕では、蕃掘と炭焼という違いはあるが、「真名野長者物語」では炭焼小五郎、武王物語では蕃掘の蕃童誕生を語る。韓国の武王物語では炭焼の蕃掘を寡婦の子としているので、真名野長者物語の小五郎の「寡子」も「寡婦の子」と解釈すれば面白いのではないかと思う。また、先日炭焼小五郎の誕生地・玉田の里を見学する機会があったが、そこには玉田川があり、その周辺は水田が広がっている。また芦刈政治氏の話によればそこには池もあるという⁹⁾。

(二)の〔神のお告げ〕では「真名野長者物語」は、炭焼と結婚すれば豊かになるという三輪明神のお告げによって都を下るのに対して、「武王物語」では蕃童と結婚して夜には姫君がその蕃童を抱きしめて去るという童謡を子供達に歌わせ、(三)の所で姫君が都を下るという展開となっている。「真名野長者物語」ではなぜ三輪明神のお告げにより玉津姫がはるばると離れた三重町の炭焼小五郎を訪ねて行くのが問題として浮上し、今後の課題としなければならないが、この物語と深く関わった豊後大神氏の存在が注目される。「真名野長者物語」では小五郎の母が龍と交わったという叙述は見えないが、その痕跡はわずかに残していると言える。すなわち、奈良の都からはるばると離れた三重町まで下ってくる玉津姫は三輪明神のお告げによって訪ねてくるのであるが、この三輪明神は水の神様である蛇神(竜神)であり、この物語と深い関連があることが考えられる。これは以前、芦刈政治氏から紹介してもらった豊後大神氏の始祖の由来を語るいわゆる祖母嶽伝説¹⁰⁾で、こういう芋環型の蛇婿入りの話が真名野長者にも投影されており、真名野長者に大神氏の関与は否定できないことであろう。

次の問題は、「真名野長者物語」では玉津姫が三輪明神のお告げによって小五郎を訪ねて行くのに対して、「武王物語」では童歌によって家を追い出されるという相違が見られる。しかし、この童歌というのは今のような子供が歌う童謡とは違って、神の予言に準ずるものである。それは新羅の善花姫が蕃童と出会った後、「あのときの童歌はこの起

きる前触れであったのだ」と善花姫自らが漏らす言葉からも推測できる。すなわち、これを言い換えれば「あのときの童歌は実は神様のお告げであったのだ」という解釈となり、「武王物語」の童歌というのは三輪明神のお告げと同じ意味を持つものと言える。

また、「武王物語」では(四)のところで炭焼窯と薯を掘るところで黄金を発見するという一致が見られる。あるいはまた「武王物語」では武王の来歴物語を志向したため、黄金を新羅の宮殿に送っており、それによって薯童は人望を得て王様となる。これに対して「真名野長者物語」では(七)のところで長者となった小五郎が天台山に黄金を送っており、天台山では百済の僧・蓮城法師に薬師観音の像を持たせて日本に送るという叙述となっている。また、(五)のところで「真名野長者物語」は池の中から亀が出てくるが、「武王物語」では弥勒菩薩三体が光を照らしながら池の中から現れ、武王はそこに寺を建立した、という相違が見られる。しかし、「真名野長者物語」の別本では真名野長者が仏教反対勢力から仏像を守るため、金亀ヶ淵に沈めたが、その仏像が光を照らしながら現れ、真名野長者はそこに寺を建立するという展開を見せており、「武王物語」との一致が見られる¹¹⁾。

また(六)のところで「真名野長者物語」は小五郎が長者に、「武王物語」では、(七)〔黄金送り〕と関して王となっている。そして最後の(八)〔寺院建立〕において「真名野長者物語」は蓮城寺、「武王物語」は弥勒寺を建立する寺院縁起説話となっている。

全体的な違い・特色をみると、「真名野長者物語」と比べ「武王物語」は、王権説話を志向したため、主人公・武王の神秘的出生と非凡さが強調されている。また、弥勒寺というのは国家鎮護の寺院で、武王が弥勒信仰を利用して国を統治し、当時落ちていた王権回復を図ったという点が「真名野長者物語」と大きく相違すると言える。が、両者はすべてのモチーフを共有しており、過去において深く関わっていた時期があり、その源流が同じであるというのは否めないことであろう。

5. なぜ炭焼ではなく、薯掘なのか。

そこで「真名野長者物語」での炭焼が韓国の「武王物語」では、薯掘となっている問題について考えてみる。

土肥健之助氏編の『大分県方言類集』¹²⁾によれば宇佐郡などでは炭をイモジという。また、柳田国男は石川県金沢市に伝承される「芋掘り藤五郎」を紹介し、この話型は日本全国に分布しており、豊後(大分県)の「炭焼小五郎伝説」に発する。この種の話の伝播を助けた者は金属の売買を生業とした旅行者の群れである。炭焼の重要な目的は金属の制御を行なうためであることを述べ、「芋掘り藤五郎」のイモはイモジとみてもよいと論じておられる¹³⁾。

また、柳田国男は、石川県金沢に近い野田の芋掘長者の話も主人公の名前が変わっているだけで、筋は一致している。同種の伝説は少し形を変えただけで、国の隅々まで分布しているが、すべてこれを内山の観音堂の縁起より新しいと断定することはできない。これらの多くの事実を総合すると、黄金発見の伝説は、もともと鑄物師の仲間の運搬したものであろうことが推定される。彼らは近世の平和時代に入るまで便宜の地に仮住まいして鑄物の業を営み、炭焼はその副業であった。すなわち炭焼長者譚はまだ中世の交通不便な時代から、すでに国の隅々まで、鑄物師によって運搬され、それぞれの土地に土着し、ぬくべからざる伝説となったのである¹⁴⁾。

また、貴金属に関する通俗書の中では、良質な鉱脈を掘り当てることを「いもを掘る」と、説明されている。「イモヅル」とか「金ヅル」という言葉は鉱山師が使いはじめており、「芋掘り」とは鉱山師が使う隠語であった¹⁵⁾。

このように見てくると韓国の薯童の場合も、単なる薯掘の童ではなく、砂鉄・黄金を掘り出し、炭を焼いて鉄を製錬する鑄物師・鍛冶族で、莫大な財力を元にその地域を支配し、ついには百済の王様になったことが考えられる。遠い昔の百済時代に炭をイモジと呼んだのかどうかは問題となるが、前述したように大分県宇佐地方では炭をイモジというところから、私は距離的にとても近く、文化的にも密接なかわりを持っていた百済のことばにも炭をイモジと称した時期があったのではないかと推測している。従来、韓国の学界では「薯童」について「炭焼の童子」、または「鑄物師・鍛冶屋」とみる見解はなかったのでこの点を最初に指摘して置きたい。

また、武王はもともと製鉄とかかわる鑄物師・鍛冶族であったとするならば、韓国で鍛冶族が王様になった事例がは

たしてあるのかが問題である。

同じ百済国ではないが、朝鮮半島の南東に存在した新羅国には第四代目の脱解王がいたが、彼はもともと鍛冶屋であった。その説話の梗概はおよそ次のようである¹⁶⁾。

- 1 東海龍城国である多波那国の王と積女国の王女が結婚、大きな卵を生む。
- 2 「縁起が悪い」と、箱船に入れて海に流す。その箱は新羅国の阿珍浦に漂着する。
- 3 一人の老婆がその箱を拾って開けてみると、中に子供がおり、脱解と名付ける。
- 4 脱解は、吐含山とほさんに登り、地勢が良い瓠公ほごんの家を訪ね、我が家にしようと、偽りの計画を立てる。
- 5 脱解は、瓠公の家の側に炭と砥石を埋めておく。
- 6 二人の間で争いがはじまり、なかなか結論がでないので役所に訴えた。
- 7 役人が脱解に「何を証拠にお前の家だというのか」と聞く。
- 8 すると、脱解は、「私の家はもと鍛冶屋でした。しばらく隣の村に行っている間、他人が奪って住んでいるので、ここの土地を掘ってください」と言った。
- 9 言う通りに掘ってみると、なんと炭と砥石が出てきたので、脱解はそこを自分の家にしてしまった。
- 10 当時の南解王は脱解が知略者であることを知って婿として迎え、これによって彼は王位についた。

このように上記の「脱解物語」は大きく二つの点で「武王物語」と一致している。一つはその出生の秘密である。王様となった脱解と武王はともに龍の子供という点である。二つ目は二人が鍛冶屋・鋳物師として王様の地位にのぼったという点である。脱解族は新羅の鉄で千古に有名な感恩浦と達川地方の鉄山を支配した鍛冶族である。初めに東海岸(日本海側)の感恩浦の鉄鉾を開発した財力によって勢力を拡大し、吐含山と達山の鉄山を支配して、莫大な財源で新羅国の都慶州へ進出する。そこを鍛冶屋の聖地とし、支配体制を樹立した鍛冶族であった。

また、武王について、百済国の没落した王族という説があるが、私は、武王は王族であり、鍛冶族(鋳物師)であったと思う。彼の母は馬龍池という池のほとりに家を作って住んでいた。馬龍池は五金寺(五金山)の南側から百歩離れたところに位置しており¹⁷⁾、武王は、その金山を支配した鍛冶族で、そこから莫大な財力を得て新羅に送り、新羅国の王様の娘である善花姫を妻として迎え、ついには王位につくことができたと考えている。現在の韓国益山市の特産品は貴金属の宝石となっているところからも理解ができる。

また、鍛冶屋・鋳物師と関ってたたら師がある。このたたらは朝鮮半島と深く関っている。『日本書紀』には、朝鮮半島の新羅などについて、「金・銀・珍宝の国」(巻第八 仲哀天皇)、「金銀の国」(巻第九 神功皇后)としており、また、同書の巻第十七には「多多羅原」という地名が見える。日本国内では、百済王子(琳聖太子)の帰化地とされる周防(山口県)の多多羅浜、筑前(北九州)の多多羅浜、山城国(京都)の任那人の帰化人部落名の多多羅などがあり、また、『新撰姓氏録』の山城国諸藩条に多多羅公という人が 任那から帰化した人で「多多利(金)」を献上して王から多多羅公という姓を賜ったという記録が見える。

私は以前、郷土史に詳しい三重町の芦刈政治氏と佐藤芳延氏のご案内で、大分県三重町の「真名野長者伝説」の足跡を訪ねたことがある¹⁸⁾。三重町の下玉田には炭焼小五郎が誕生したとされる場所があった。その周辺は今でも玉田川にそって水田が広がっており、その玉田川の水源はマンガン鉾、鉄鉾の産地本城山である。その麓の高寺区には数多くのタタラ、イモジの地名が残されている。また対岸の中尾区には戦国時代の刀鍛冶の跡もある¹⁹⁾。

このように三重町内にも鍛冶平(久知良)、タタラ(高寺)、タタラ(上田原)、イモジ(高寺)、タタラ(内山)などに製鉄・鍛冶に関する地名が多く残されている²⁰⁾。私は三重町の「久知良」という地名は百済と関係のある製鉄集団が住んだ村であり、今後実証しなければならない問題であるが、百済から渡来してきた氏族、または百済と親戚関係にあった村ではなかったのか、と考えている。この問題は、「真名野長者物語」に登場する「真名(原)」「柴守」「藤次(治)」「伊利大臣」「金政公」などの異名とかがわって、今後追跡すべき課題である。

6. 大分県の「真名野長者物語」（内山観音、蓮城寺）と百済国

前項で述べたように 韓国の「炭焼長者」の中で大分県三重町の「真名野長者物語」に一番近い説話であり、歴史的にも一番古いのは、百済・第三十代王様の物語の「武王物語」であった。「真名野長者物語」が三重町で伝承されているように、韓国の「武王物語」が伝承されているところは、今の韓国全羅北道益山市である。

では「真名野長者物語」と「武王物語」という共通の物語を持っている大分県と韓国（百済国）との関わりをどう見たらいいのであろうか。まず、「真名野長者物語」には百済と関わって次のような叙述が見られる²¹⁾。

（玉津姫が金亀ヶ淵で顔を洗って美女に変身後）百済国から商船三隻が宝を積み、白杵港に到着。小五郎はその宝をことごとく買い占め蔵に納めた。

（般若姫出生後）百済国の船頭である龍伯がおびたしい宝物を積んでくる。その中には百済国の千手観音があった。長者は般若姫の二世安楽のために百済国の龍伯に頼み、唐土の寺院に黄金三万両を寄進した。返礼として百済国の蓮城法師が仏像を持って来朝する。小五郎は喜んで一寺を建立し蓮城寺とした。

（般若姫上洛時）欽命天皇二十一（五六〇）年百済国から龍伯と定馳子^{じょうちし}の二人の船頭が白杵港に数多くの宝物を積んできた。長者はことごとく買い取り、龍伯に般若姫上洛時の船頭を依頼した。

このように百済と大分県は頻りに貿易などを通じて交流があったことが考えられる。勿論これは近世の資料なので古代からの交流について今後もっと調べる必要がある。

また、蓮城寺の開基は、一説で敏達天皇十二（五八三）年と言われているが、この敏達天皇十二（五八三）は、百済国の第二十七代の威徳王（五五四～五九八）時代で、韓国の「武王物語」において武王が薯掘として池のほとりで寡婦の母と暮らし、黄金を発見する子供の時代に当たる。

また「武王物語」では、薯童が新羅国の第二十六代 真平王の王女の善花姫と結婚するが、敏達天皇十二（五八三）年は、この真平王の在位時期（五七九～六三二）に当たる。

さらにこの時代は日本に仏教伝来（五三八、一説五五二）、医・易・暦など伝来（五五〇）（以上、公州時代）、経綸・律師・禅師・仏工・寺工（五七七）（扶余時代）が伝来するなど、日本との交流が盛んな時期であった。また、この時代の百済国の都（最後の都）は扶余であった。大分県には豊後大神氏の出生と関わる「祖母山」が存在するが、その「祖母山」の古名は「添山（そほりのやま）」である²²⁾が、百済の都・扶余の別名も「所夫利」であったことが『三国遺事』巻二の「紀異第二」²³⁾に記されており、大分の地名との一致が見られる。こう見ると大分と百済国は古い時代から交流が盛んに行われたことが考えられる。現在の韓国の首都は「ソウル」であるが、それは都を意味する言葉で、百済の「所夫利」と大分の「添利」と同源である。この「添利」の地名も芋環型の蛇婿入りの新婚譚に属する豊後大神氏の始祖神・祖母嶽明神と関わって今後研究すべき課題であるが、武王の出生地の益山市は扶余の隣町に位置する。益山は錦江と万頃江という川に挟まれており、この水路を通して西海岸へ出て、日本に渡る交通・軍事・貿易の中心地であった。

7. おわりに 真名野長者は実在した

今後の「真名野長者伝説・物語」研究の課題は、諸本についての詳細な比較研究、歴史学、考古学、百済仏教（百済観音）、言語学などの総合的研究を行う必要があり、大分県三重町、白杵市などと韓国とが古代においてどういう交流があったのかを究明する作業が至急に要求される。

たとえば、大分県三重町には「久知良」という地名が存在するが、私はこれは「くだら」（百済）と関わる地名であると考え、2003年1月、三重町の真名野長者伝説地を訪ねたとき、芦刈政治氏、佐藤芳延氏と韓国の国立群山大学副教授の高大坤氏に述べたことがある²⁴⁾。この「久知」という地名は実は百済の地にもいくつか存在している²⁵⁾。「久知」というのは韓国語で「堅い」という意味があり、実は「鉄」を意味するものである。では、「久知良」での「良」は何を意味するのかであるが、これは「国」または「村」を意味する。そうすると、この「久知良」というのは「製鉄を行う村」、または「製鉄集団」であるという意味になる。このような「久知」という地名が百済の地にあったという

のは、三重町と百済が昔から人的交流があったということの証明である。

私は「真名」という人物も実在した可能性がきわめて高いと思う。『日本書紀』巻第十六の武烈天皇五(五〇二)年冬十月条には「百済国の嶋王(武寧王)が麻那王を遣わして、調をたてまつった」とあり、同七(五 四)年夏四月条には「前に調をたてまつった麻那は百済の国王の骨族ではありません」と、「麻那」(マナ)の名前が見えており、「麻那」が百済人として記されている。ここで「麻那」という人が百済の国王(武寧王)の一族とは違った別系統の王族であったのかどうかは問題となるが、武烈天皇五(五〇二)年冬十月条には、「麻那」に王の字がついていることから王族でありながら、武寧王と深く関わる人物であることは間違いないことであろう。真名野長者の「真名」は当て字で『日本書紀』に見える「麻那」と同一人物または氏族であることが考えられる。

「真名野長者物語」では真名野長者の前世が百済国の「柴守長者」であり、日本に生まれ変わったとあるが、ここには大きな意味が潜んでいる。私はこの「柴」も当て字であり、百済の国王であった「武寧王」と関わる人物であると考えている。武寧王は四六一年九州の「各羅島」で出生したという人物で、諡号は「斯麻王」である²⁶⁾。この「斯麻」は「柴」に対応し、「守」(もり)は一番偉い人を意味していることから「王」に対応する。こう見てくると「柴守」は「斯麻王」(武寧王)を指すか、『日本書紀』に記されているように武寧王と深く関わる王族(麻那王)であることが考えられる。また、「柴(シバ)」の「シ」は、韓国語で「鉄」、「バ」は「原」(バル)を表すことから、「柴(シバ)」とは、「鉄原」という意味にもなり、「柴守」とは、その「鉄原」の首長(王)であることが考えられる。すなわち、「真名」という氏族、おそらく王族で製鉄集団であることが考えられるが、この「真名」(麻那)氏族が何らかの理由(おそらく政権争い)で大分県三重町に移動し、それによって「武王物語」にきわめて近似した、真名氏族(王族)の神話とも言える「真名野長者伝説・物語」の原型というものがいっしょに運ばれたのではないかと推測している。また、この蓮城寺(内山観音)の建立と関わる蓮城法師などもこの「真名」氏族と深く関係のある宗教集団であったことが考えられる²⁷⁾。

こう見てくると『三国遺事』に記録されている「武王物語」は、実は武王ではなく、武王の先王である百済国第二十五代の武寧王(斯麻王、五 一~五二三)か、同国第二十四代の東城王(末多王、四七九~五 一)の物語である可能性も排除できない²⁸⁾。麻那(マナ)の名前の初見は前述した『日本書紀』の武烈天皇五(五〇二)年であり、その麻那王を日本に派遣したのが武寧王二(五 二)年であることと、「真名野長者伝説」に記されている真名野長者の誕生年が継体天皇三(五 九)年であることを考えると、「武王物語」とするよりは「武寧王物語」か、「東城王物語」とした方が年代的には「真名野長者伝説」に近く、妥当性があるように思われるが、これについては今後の課題としたい。

最後に、この「真名野長者物語」と「武王物語」を町づくりはどういさせるかについて、ひとこと提案したい。まずは、行政側のサポートが重要である。総合的研究のための専門家招聘、それにとまって金銭的な援助が必要であろう。また別府市にくる韓国人などの観光客を大分県三重町に連れてくることである。あるいはまた三重町が韓国とのゆかりの地であることを利用して、韓国からの観光客を誘致することである。また、炭焼小五郎伝説に因んだ観光商品開発とコース開発などが望まれる。三重町の特産品として炭焼小五郎・玉津姫石鱈などを開発し、観光客に売ることである。さらには真名野長者伝説に因んだ温泉設備を整えることである。炭焼小五郎風呂や玉津姫風呂など、古代ロマンに思いをはせる憩いの場を作ったらどうだろうか。

注

1. 「炭焼小五郎が事」(『海南小記』1925)

2. 1978

3. 「炭焼小五郎と真名野長者 - 「宇佐大神氏進出説」批判(4) - 」(『大分県地方史』第121号、1978)

4. 「真名野長者近世物語本の成立に関する一考察」(『大分県地方史』第158号、1995)。これに先立って芦川政治氏は「真名野長者物語」(『大分合同新聞』1990年1月30日から34回連載)を発表しておられる。これは真名野長者伝説をとりあげて、

大分県の「真名野長者伝説・物語」と韓国

物語ができあがっていく過程を詳細に推論されたもので、学ぶべきところがきわめて多い。

- 5 .三重町立図書館、1998
- 6 .『伝承の文学』（風間書房、1997）の「真名野長者伝承」
- 7 .大分県三重町立図書館読書と創作を楽しむ会、2002
- 8 .芦刈政治・麻生英雄両氏編著『三重町蔵本「内山記」真名野長者物語』（大分県三重町、1996）による。
- 9 .2003年1月10日、芦刈政治、左藤芳延両氏のご案内による。『大分合同新聞』（2003、1、11）に「真名野長者伝説・武王物語似ている、韓国の専門家らが三重町訪問、研究会設立、交流も」、『TV大分（TOS）』（2003、1、10、16：00）のニュースで「真名野長者伝説、韓国の研究者三重町」として報じられる。
- 10 .「祖母嶽伝説とその周辺 伝承地を探る」（芦刈政治氏講演会、2002、6、17、立命館アジア太平洋大学）
- 11 .「万野長者来由口演記」（近藤喜博氏『四国遍路』桜楓社、1971所収）
- 12 .国書刊行会、1975（明治35年版の復刻）
- 13 .前掲注1に同じ
- 14 .『民俗学辞典』（東京堂出版、1951）
- 15 .美田幸夫氏のホームページ「新説・芋掘り藤五郎」による。
- 16 .『三国遺事』の「奇異第二、第四脱解王」条
- 17 .これに対して羅鐘宇氏は「百済武王（訾童）物語の歴史的背景 大分県三重町・APUとの地域交流の展望」（講演会、2003、7、16、立命館アジア太平洋大学と2003、7、17、三重町蓮城寺<内山観音>大師堂）において、「従来の学説では、五金山を益山市金馬面西古都里にある益山土城<別名、報徳山城>としているが、この説は再考する必要がある」と言って、五金山の位置は現在の益山市王宮面九德里金村であると主張している。羅鐘宇氏の講演と真名野長者伝説研究会の設立総会は、『大分合同新聞』に「18日APUで韓国円光大の羅鐘宇教授が講演」（2003、7、16）、「真名野長者伝説を後世に、三重町に研究会が発足、韓国と交流も」（2003、7、26）として報じられる。
- 18 .前掲注9に同じ
- 19 .芦刈政治氏、前掲注4『大分合同新聞』の「真名野長者物語 刀鍛冶の跡に関係」（連載の第33回）
- 20 .三重町役場企画商工観光課編『大分県三重町誌総集編』（三重町、1987）の第二編第二章 古代・中世の三重郷の「炭焼小五郎伝説」
- 21 .前掲注8に同じ
- 22 .『日本書紀』巻第二「神代下 第九段」に「添山、此をば曾褒里能耶麻といふ」とある。
- 23 .「南扶余 前百済 北扶余」条に「扶余郡者。前百済王都也。或称所夫里郡」とある。
- 24 .前掲注9に同じ
- 25 .『三国史記』巻第三十六、地理三に「求礼県 本百済仇次礼県 景德王改名 今因之」とあって、「仇次礼」という地名が見える。また『北史』の「百済伝」、『周書』の「異域伝 百済条」に「久知下城」などの地名が見える。
- 26 .1971年7月、韓国忠清南道公州市（古名は熊津）の王陵から一枚の墓誌石が発掘された。その墓誌石には「寧東將軍百済麻王は六十二歳で癸卯年（523年）五月に崩御した」と記されている。『日本書紀』巻第十六「武烈天皇」四年条に「武寧王のいみなは嶋王で、彼の母が日本（倭）に向う途中、筑紫の各羅島で生んだ。よって嶋王と名づけた」とある。
- 27 .「真名野長者伝説新たな展開 大韓民国・武王物語との類似性」（三重町真名野長者伝説フォーラム実行委員会編『真名野長者伝説フォーラム』2003、4、6）、真名野長者伝説フォーラムの様子は、『TV大分（TOS）』（2003、4、6、17：54）のニュースで報じられる。
- 28 .『三国遺事』の遍者・一然は「武王物語」に登場する武王について「古本に武康と書いてあるが、違う。百済には武康はいない」と、「武康」を「武王」と見ている。これに対して、金思燁氏は『完訳三国遺事』（明石書店、1997）において、武康の「康」は「寧」と同義であるから、武康王は武寧王の異写と見るべきである。選者の注記は速断であると主張している。また史在東氏「訾童説話研究」（『葦庵池憲英先生華甲記念論叢』湖西文化社、1971）、徐大錫氏『韓国神話の研究』

(2001、ソウル集文堂)も、「武康王は武寧王であり、武王ではない」と論じている。

「武王物語」の武王は、百済国の第二十四代の「東城王」(四七九～五〇一)をさし、「武王物語」は「東城王物語」とみることできる。武王の幼名は、「薯童」である。『日本書紀』の武烈天皇四年条によれば、百済国の「東城王」を「末多王」としているが、この「末多」は「薯童」の音に通じる。「東城王」について、『三国史記』には「牟大」、『南史』、『南齊書』、『梁書』の「百濟伝」には「牟都」の子、または孫として「牟大」が見える。『日本書紀』の継体天皇十三年条に「任那王、己能末多干岐が来朝した」という記録が見え、この任那の「己能末多干岐」は、百済の「末多王」(東城王)と同系列の名前と見ることできる。したがって、東城王は任那(伽耶)系統の百済王である可能性もある。『日本書紀』巻第十六の武烈天皇四(五 一)年条には、「この年、百済の末多王が無道を行ない、民を苦しめた。国人はついに王を捨てて、嶋王(せまきし)を立てた。これが武寧王である」と記され、武寧王によるクーデターが起きた可能性が考えられる。東城王が伽耶系の王だとするならば、これによって王統が武寧王の扶余氏系統に移ったことを意味する。こう見ると、『日本書紀』巻第十六の武烈天皇七(五 四)年夏四月条に、「前に調をたてまつった麻那は百済の国王(武寧王)の骨族ではありません」と、麻那王が武寧王と違った別系統の王として記されているのも納得のいくところである。また、東城王の子を「麻那王」と見ることでき、「麻那王」は父の東城王の失脚後、日本(大分)に移り住んだことが考えられる。「真名野長者伝説・物語」では、「真名野長者は、百済国の柴守長者で、日本に生まれ変わった」とあるが、この叙述は上記のような史実の反映ではないのかと、考えている。が、これについての詳論は別の機会に譲ることとしたい。

付記

本稿は、大分県三重町町民大学講座(2001年9月20日)、「真名野長者物語と韓国の炭焼長者」の講演の草稿をもとにして作成したものである。私の拙い講演にもかかわらず、席上活発なご意見をいただいた三重町文化財保護委員長の上野卓男先生と町民の皆様方に深く感謝申し上げます。また、三重町との良いご縁を作っていただき、三重町の真名野長者伝説地などのご案内をしていただいた郷土史家の芦刈政治先生、三重町訪問時にいつも暖かいもてなしと資料の閲覧などを快く許して下さった蓮城寺の大観ご住職夫妻、前大分県立野津高等学校校長の左藤芳延先生などにも深く御礼を申し上げます。また、「講演会」「真名野長者伝説フォーラム」などの折には、三重町教育長の玉田義征先生、真名野長者伝説研究会(田中啓信会長)の皆様と三重町役場・企画振興課の赤嶺信武課長と左藤文紀補佐にもひとかたならぬお世話をしていただいた。あらためて深く感謝申し上げます。